

現代中国の書家二十人を紹介する不定期連載

# 中国当代書家二十人

第10回

監修  
蘇士澍  
中国書法家協会主席

取材・文  
郭同慶



## 韓天衡

かん・てんこう  
一九四〇年、上海に生まれる。斬新な作風の書画印により、書壇・画壇・印壇を席巻。一九八四年、上海中国画院副院長に就任（二〇〇〇年まで）。著書および作品集は、百四十冊を超える。現在、上海中国画院顧問、上海市書法家協会首席顧問、西泠印社副社長、中国芸術研究院中国篆刻芸術院名譽院長、上海韓天衡文化芸術基金会理事長、上海韓天衡芸術教育基地（学校）校長、上海吳昌碩芸術研究会会長、上海吳昌碩記念館館長、中国石彫博物館館長など

かつて趙之謙や吳昌碩が活躍した中国・上海……。現在、その「海派」の書壇・画壇・印壇で、最も輝かしい影響力を放つ存在が韓天衡氏である。新しい篆書書風「草篆」を完成させ、斬新な印風を確立。画風もまた古今に例を見ない。八〇年代から韓氏と親交を結ぶ郭同慶氏が上海の韓天衡美術館にて取材した。（編集部）



《誨人不厭》

2018年



《如意》



2019年

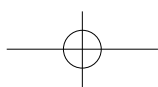
中国当代



《胸有聖人》



2017年



# 輝く海派の新座主 韓天衡

## 書壇・画壇・印壇の巨匠

日本人に最も馴染みのある巨匠、趙之謙ちやうしけんや呉昌碩ごしょうせきは、近代上海の書壇・画壇・印壇の領袖であった。中国では一般的に上海の書画を「海派」、北京は「京派」、南京は「金陵派」、西安は「長安派」、広東は「嶺南派」と称す。「海派」を前期、後期、そして当代と三つに分けていえば、今回紹介するのは、まさに当代海派の書壇・画壇・印壇の巨匠であり、「新座主」の韓天衡氏である。ちなみに、前期は任伯年や趙之謙、虚谷ら、後期は呉昌碩、王一亭、そして清朝の「遺老」である沈曾植、康有為、李瑞清らが代表である。当代には劉海粟、王个簃、謝稚柳、陸儼少、程十髮、王蘧常、白蕉、錢君匋らの巨匠がいた。今日、国内外で影響力が最も大きい突出した存在は、韓天衡氏しかない。

今年の早春、上海市西北部にある韓天衡美術館を訪ね、一九八〇年代からの老友・韓天衡氏を取材、その場には韓夫人・応麗華女史や新任館長・顧工氏も同席した。

日本に多くの知人・友人、そして門人を持つ韓天衡氏は、現在、上海中国画院顧問、上海市書法家協会首席顧問、西泠印社副社長、中国芸術研究院中国篆刻芸術院名誉院長、上海韓天衡文化芸術基金会理事長、上海韓天衡芸術教育基地（学校）校長、上海呉昌碩芸術研究協会会長、上海呉昌碩記念館館長、中国石彫博物館館長などの公職を兼務しているため、八十歳の高齢にもかかわらず、超多忙の日々をこなしている。

## 腕白少年が貴人に出会う

本名は振権であり、「天衡」は篆刻の師より授けられた。韓天衡氏は一九四〇年に上海の象牙豪商の家に生まれた。父親の鈞銘公は日本、韓国、南洋のシンガポール、マレーシアまで手広く象牙の商売を順調に営んでいたが、一九三七年に日中戦争が勃発し、城隍廟じやうかうにあった象牙店や倉庫がすべて空襲で灰燼に帰した。一家は一夜のうちに平民になり、父親が家にいる時間が増え、よく子供の書写を見てくれた。天衡少年は屋根の上でバドミントンをするほど腕白でありながら、四歳で習字、六歳で篆刻に触れ合い始めた。父が家にいれば、父が書いた手本を元に、よく姉と兄と天衡の三人兄弟に競書させた。よく書けたときには父が褒めてくれたので、幼い天衡は書画に対する意欲や自信を芽生えさせ、負けず嫌いという性格も鍛えられた。

太平洋戦争が終了した翌年、六歳の天衡少年は家にある印材を遊びで刻り込んでみた。思わず印刀が滑って左手を深く刺した。切口は広く深い。血だらけだった。母親が仏壇にあった線香灰を傷口に捲き、布で切り傷口を縛り付けてくれた。幸運なことに炎症は起きず、二カ月で治った。しかし、傷跡は七十数年を経た今でもよく分かる。普通の子供であれば、おそらく印刀が嫌いになったはずだが、天衡少年は「血債要用血来還」（血の債務は血で返せ）と内心で叫び、必ず印刀を思うままに扱えるようになると決心した。この「流血事件」が「篆刻巨人」に至る人生のきっかけだった。

青少年期はほぼ毎日石をいじり、印床がなくても印稿を作らなくても何にでもチャレンジし、篆刻にとことん没頭した。

同年、韓天衡は南市区（上海市）の小学校に入学。旧制小学校の先生たちは国語に優れ、硬筆・軟筆を問わず、書写が得意だった。子供たちにも書写を念入りに指導した。書写の宿題として必ず毎日、支給された二冊の交代用ノートを交互に提出していた。顔真卿と柳公権の書を手本に一ページに十六文字を書き、天衡少年は常に十六個の丸印をもらい、二重の丸印を入れると二十数個の丸印をよくもらったので、クラスで一番優秀だった。隣のクラスにいた習字が得意な生徒がよく天衡少年を指名し、丸印の数を競べ合った。負けた方がその負けた数だけ鼻先を擦られるのだ。相手はいつも鼻先を真っ赤かにして、落胆して帰って行く。それでもよくノートを持参し、勝負を挑みにくる相手がいいたそうだ。

天衡少年は、国語や作文が得意である一方、数学、物理、化学および英語には無関心で、書画や篆刻にだけ好奇心旺盛だった。鄭竹友先生が、天衡少年の啓蒙の師になったのはその頃である。静安区成都通りに住む同級生の自宅が鄭先生宅と隣同士で、天衡少年はその同級生と一緒に鄭先生を訪ね、入門を果たしたのである。

張大千の常用印を刻した印壇の巨匠・陳巨來（一九〇四—一九八四）は、その著書（『安持人物瑣憶』）の中で、「書画の贗作づくりの三人の達人（湯臨沢、周竜昌、鄭竹友）」として言及している。書と画の両者に優れた表現力を持つ鄭先生は、天衡少年に各種碑帖の臨書方法を指導し、梅、蘭、竹、菊などを描く筆遣いも教え込んだ。鄭先生宅に三年間通い、稽古を受けると同時に、鄭先生の古書画のコレクションや贗物制作の様子も目



山 駿馬加鞭未下鞍 驚回首 離天三尺三

131×65 2016年

草篆《十六字令》（毛沢東）

に焼きつけた。鄭先生の影響で古書画や古美術の蒐集に対する関心を持つようになったという。もちろん家系や血筋（象牙豪商家の出身）もあるが、後に海派書画界でも随一の収蔵家になった韓天衡氏の蒐集人生は、この十代後半頃から始まったといえよう。

ちなみに、卓越した技術を持つ鄭先生は、一九五八年に周恩来首相の指名で北京故宫博物院修復部の責任者になり、国のために立派な仕事を幾つもこなした。特

に米芾《苕溪帖》の修復に天下一の腕をふるい、文化財保護に大いに貢献した。日本でも馴染みの中書協（中国書法家協会）の元副主席・劉炳森氏（一九三七—二〇〇五）は大学卒業後に故宫博物院に入り、鄭先生に就き、韓天衡氏と兄弟弟子になった。

ところで、文系各科目が得意で書画に夢中の天衡少年は、数学・物理・英語などには興味が持てず、大学は諦めて十六歳で国営上海第六綿紡績工場に就職し、

品質検査室の検査員職に就いた。仕事は難しくないが、勤務時間が長い。五〇年代の後半より、経済「大躍進」のキャンペーンが政府の主導により実行され、「十五年間で英国を追い越そう」というスローガンに従って全国民が日夜動員され、「奮闘」したのである。紡績工場が最も期待される業種だったので、天衡少年は毎晩残業で三、四時間ほどしか睡眠できず、大好きな書画を楽しむ時間もなかった。もはや書画家になる夢は破れる



150×76 2017年

衡遠山 吞長江 其西南諸峰嶺壑尤美 送夕陽 迎素月 當春夏之交草木際天

かと思いはじめた頃、人民解放軍が上海で徴兵するチャンスが到来。文書部門配属の可能性も知って、喜んで入隊した。

人民解放軍海軍の温州水警区輸送中隊に配属された。徴兵された兵士の大多数は農村出身で、読み書きすらできない者も相当数いた。一方、天衡少年は書画はも

ちろん作文も得意だったので、文書部門の担当として大活躍することができた。兵役生活も十年間が経過し、義務徴兵制度下における兵役歴の最長者にもなった。この十年間は時間もあり、書画の勉強も進んだ。

韓天衡氏が印壇の第一人者になった理由として、時間以外にさらに二つ、客観的な良い環境に恵まれたこ

とが挙げられる。

第一に、近くに印壇の巨匠が住んでいた。一九六一年、駐屯地・温州に在住していた印壇の巨匠・方介堪先生（一九〇一—一九八七）に入門し、「天衡」を授けられ、以降、篆刻・書画では本名ではなく「韓天衡」と名乗るようになった。方先生の指導のもと、秦漢代の官印

や明清各派各家の代表的な篆刻作品の模刻は日課だった。入隊前後を合わせれば、三千顆の大打を越える数を刻り続けた。

第二に、近くに印材の産地があった。駐屯地の西に天下一の良質印材・青田石の産地・青田県があった。青田石は寿山石、巴林石、昌化石と合せて「四大印材」といわれ、かつその長である。産地の工場に直接足を運び、かなりの低価格で大量購入することができた。だが、ヤスリは安くないため、コンクリートの床面で石を削ったそうだ。

成功の三要素「天の時」「地の利」「人の輪」が揃った韓天衡氏は、印壇・書壇の人々と積極的に触れ合った。一九六二年、同じく温州出身の書法大家・馬公愚先生（一九〇〇—一九六八）に書道で入門、また方介堪師の引き合わせで、呉昌碩の一番弟子の王介籙氏（一九七—一九八八）や朱屺瞻氏（一九九二—一九九六）を訪問し、いろいろと教わった。

一九六三年は、二十三歳の韓天衡氏にとって特別な年だった。まずは、温州市民書法展に入選。さらに新中国の誕生から十四年目にしてようやく復活した西泠印社が主催した最初の篆刻展覧会で、韓天衡氏の印作が特別に入選したのだ。二十三歳の韓天衡氏の印風は、印社内外で高く評価されることになった。

さらに時の名教授、中国美術学院（当時は浙江美术学院）の書法専攻科創設に尽力した陸維釗氏より、面識のない若手印人・韓天衡氏に書簡が届いた。文面は評価や激励、と同時に期待も込められていた。というのは、戦後の経済の急速発展に伴い、文化も大きく発展した日本の篆刻界で、一部ながら尊大ぶる風潮が台頭し始めたというのだ。そして、ぜひ韓君のような若手印人に頑張ってほしい、中国篆刻の実力や発展を日本の印人たちに見せてほしいと続いた。

他にも新星・韓天衡氏の誕生で、各方面から讚美や激励が寄せられたが、注文を付けた先輩もいた。師の従兄弟である上海書法家協会副主席・方介疾先生（一九二二—二〇〇一）だ。介疾先生は韓天衡に対して秦漢風の古典派印章を十分によくできていることは評価した上で、印風の変化を求めた。韓天衡氏は考えた末、篆刻の変革は、篆書から始まらないといけないと悟った。韓天衡氏は、秦ではなく漢の篆書、石碑の題額の篆書、漢の磚、漢の瓦当に着眼し、収集し始めた。十二年間をかけて、それらのエキスを有効に生かした、個性が鮮明でかつ奔放な篆書書風が完成し、書壇はそれを「草篆」と呼ぶ。また、「草篆」や漢印の「鳥虫篆」を、美しくアレンジした姿で篆刻に取り入れたことにより、斬新な印風も出来上がった。すぐさま爆発的な人気を得た。

書画・篆刻の大家である鄭竹友、方介堪、陸維釗、方介疾らは、青少年期の韓天衡氏を育て上げた貴人・恩人なのである。

### 印を手に師や友と交流

『論語』に「文を以て友を会す」という言葉があるが、韓天衡氏は印を持参し、数多くの師や友と交流した。数えれば八十人を超える書画の大家たちが、韓氏の丹念な印作を愛用。北京の巨匠・李可染氏もその一人である。韓天衡氏は李画伯宅で、言われた通りの印文で十分もかからずに刻り上げ、画伯や同席した書壇の関係者たちを驚かせた。

上海では、方介堪師の紹介状を持参し、上海画壇の重鎮で上海博物館の権威・謝稚柳氏（一九一〇—一九九七）や上海中国画院院長代理・唐雲氏（一九一〇—一九九三）を訪問し、両巨匠にそれぞれ十顆の印を刻った。篆刻から始まった縁で、謝稚柳先生に書画で入門した。

人民解放軍では一般的に服役は三年間だが、韓天衡氏は同駐屯地の最長で、服役歴十年にも達した。一九六八年に退役。本来は、韓天衡氏の実力や知名度からすれば、書画関係の機構や団体に容易に再就職ができるはずだったが、文化大革命期間中で、文芸界は毎日のように「闘争・批判・改造」の運動を盛んに行い、新人や中途の採用はなかった。韓天衡氏は市水道局共產党委員会秘書課に配属され、そこで文筆の腕をふるい、瞬く間に大黒柱になった。党の幹部とも厚い信頼関係を構築し、上司は韓天衡氏の書画印の活動を応援してくれた。一九七八年までの十年間は水道局職員でありながら、故郷に戻った韓天衡氏は、上海の各種書画印の団体活動に活発に参加し、大家との親交も深めていった。

まずは、陸儼少画伯（一九〇九—一九九三）との親交。七二年頃、上海中国画院も文革の被害を回避できず、山水画の重鎮たちは、同院の若手画師や造反隊員たちに精神・肉体の両面より激しく攻撃された。陸先生の書画に対する崇拜により、韓天衡氏はこの苦難の時期に密かに陸先生の精神面や生活面を支えた。陸画伯は忘年の交わりで弟分の韓天衡氏に書画の秘訣など何でも教えた。百枚にもものぼる力作群を特別に韓天衡氏に贈った。韓天衡氏はそれを記念するために書齋名を「百楽齋」と名付けた。逆に韓天衡氏は、画伯の山水画や書作に合う遊印や落款印などを制作し、約三百顆を贈った。画伯はそれらを生涯にわたって愛用した。

一九七三年に上海中国画院院長の人物画大家・程十髮氏（一九二二—二〇〇七）に出会い、やはり百顆以上の印を贈った。同年、書家・徐伯清氏（一九二六—二〇一〇）の引き合わせで、美大教授の応野平画伯（一九一〇—一九九〇）、また、上海師範大学美術学部部長の人物画家・劉旦宅氏（一九三一—二〇一一）、浙江美術学



143×34×2 2016年



出沒浪濤三萬里  
笑譚今古幾千年

院（現在の中国美術学院）教授・周昌谷画伯（一九二九—一九八五）を前後に訪問し、それぞれ百顆、十顆、二十顆の印を依頼され、刻り上げた。

そのうち周昌谷画伯が韓天衡氏の草篆や鳥虫篆の印作を面白いと思ひ、朱関田氏を経由して、印壇の大御所、後に西泠印社社長になった沙孟海先生（一九〇〇—一九九〇）に批評を求めた。沙翁は返信の書簡において、韓天衡氏が切り開いた新しい印風を肯定的に高く評価した。その書簡を読んだ周昌谷画伯は喜び、直ちに韓天衡氏に送った（書簡は韓天衡美術館に所蔵）。

一九七六年、滬浙書法交流展が杭州で開催（滬）は上海、「浙」は浙江省。沙翁はインタビューで、全体

的には特に変わりがないが、韓天衡氏の草篆書体は新

意が顕著であると述べた。その直後に滬浙の両地より、

韓天衡氏に草篆書作を求める声絶えなかった。面識

もない沙翁の強い押しで、韓天衡氏は書壇や印壇でい

きなり頭角をあらわした。そこで、感謝の気持ち直

接に伝えたく、朱関田氏に案内を頼み、沙翁宅を訪ねた。

沙翁も初めて韓天衡氏の原印を実見し、「君の印風は全

く斬新だ」と評価し、続いて朱関田氏の前で「天衡君

は趙之謙以来、このような斬新な印風を切り開いた唯

一の印人だ」と述べた。韓天衡氏はこのような高い評価

を重鎮の沙翁に言われて、嬉しくて体が震えたという。

しかし、韓天衡氏の良いところは、成功や栄光に溺

れず、いつも新天地を追求し続けたことだ。

### 「宮廷」画院の副院長を務める

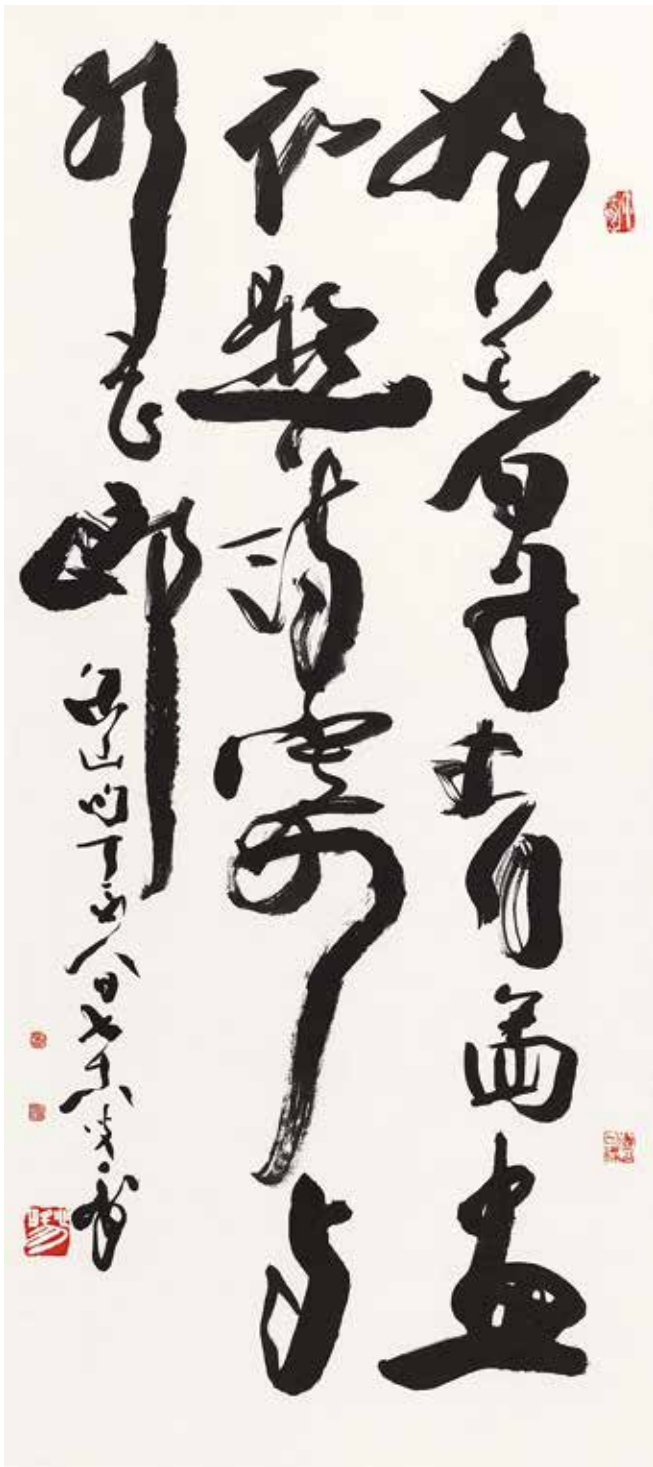
一九七二年、田中角栄首相が訪中して日中の国交が正常化。さまざまな訪中団が組織され、上海中国画院を訪れる日本の書道団体も多かった。

文革によって蹂躪された同画院は、若い働き手が極めて欠乏していた。画院名誉院長の王个簪氏や院長代理・唐雲氏、ならびに上海博物館の謝稚柳画伯の推薦により、韓天衡氏は七四年頃から臨時職員として訪中団の対応や交流展の準備を担当した。七六年に文革が終了。韓天衡氏は七八年に長期契約職員となり、八〇

年に正式に市文化局長が辞令を発行し、韓天衡氏は正式にプロへの転身を果たすことができた。書法創作組に配属。前後に入った周慧珺氏（一九三九—、後に中国書協副主席や上海市書協主席を歴任）、張森氏（一九四二—、後に上海書協副主席兼秘書長や市美学学会副会長を歴任）、童晏方氏（一九四六—、西泠印社副社長）と四人ですぐに画院の中堅勢力を形成し、文革後の復興に大いに貢献し、三名の先輩——葉路淵氏（一九〇七—一九九四、当時七十一歳）、胡問遂氏（一九一八—一九九九、当時六十二歳）、翁開運氏（生年不詳）と一緒に研究や創作活動を行った。

今日、「画院」や「書画院」と名のつく組織は、各地に数え切れないほど多い。しかし「中国」とつく北京中国画院と上海中国画院は最も歴史が古く、格式が高い。一九五六年に周恩来首相が戦後の文化復興のための具体策として、北京・上海の両地への「中国画院建設案」を国務院会議で通過させ、四年の準備期間を経て一九六〇年に設立されたのが北京と上海の国立画院——昔でいえば「宮廷」画院なのである。

韓天衡氏は一九八〇年に四十歳で画院へ転入し、二〇〇〇年に六十歳で画院を退職した。画院で活動した前半は、篆刻家・書法家として創作及び研究に邁進した。中国の印学や篆刻史の研究が遅れている現状を改善する強い意欲で取り組み、成果として著書《中国篆刻芸術》（一九七九年、上



草書《白居易詩句》

好著丹青圖画取 題詩寄与水曹郎

97×44 2017年

海書画出版社）、論文《印学の空白を補填する著書、方去疾著『明清篆刻流派印譜』を読む》（一九八二年）、《印学三題》（一九八三年、武漢市書法家協会出版）、さらに《五百年印章側款藝術の初探》《明代流派印章初考》《九百年印譜史考略》の三つの大作を発表し、印学史上で前人未踏の地を開拓した。また鳥虫篆や草篆などを駆使した斬新な印風、前人未踏の印学理論、その両面の魅力により、篆刻史上で空前絶後ともいえるべき篆刻ブーム、そして韓氏印風を真似る風潮を巻き起こし、当時の評論家やメディアはその現象を「韓流滾滾」と評した。

一九八四年末、画院のトップの世代交代により、韓天衡氏は副院長となった。院長は程十髮氏、他に方増先氏（一九三一—）と張桂銘氏（一九三九—二〇一四）が副院長——この四人体制で画院の新しいステージの

幕が開いた。韓天衡氏の副院長在任中の業績は、次の三つを挙げることができる。

第一に、「新春院展」の改革だ。従来は、各自が年間に創作した作品より自由に二点を運び発表していた。しかし展覧会終了後には作品を画院へ上納しなければならず、いい作品は手元に置きたいと思う院士が少なくないため、傑作が集まらない。メディアや市民の「新春院展」に対する評価は厳しかった。韓副院長はそれらの意見を集約し、上納慣習を廃止する大胆な改革案を程院長に提出し、採用された。「人心を得る者は天下を得る」と言うが、韓副院長はその人望によって画院業務を上手く運営し、一九八五年に開催した「新春院展」には想像以上に力作が揃い、院展は好評に戻った。

第二に、画院の収蔵品を強化。従来の古書画の蒐集予算を見直し、捻出した予算を有効に活用。当時は今





ほど書画のオークションが盛んではなく、文化復興の時代の到来前夜だったので、値段が安かった。韓副院長は親交のある当代最高峰の画家・書家に協力を依頼し、比較的低価格で劉海粟、謝稚柳、陸儼少、朱杞瞻ら大御所の傑作を画院に数多く収蔵することができた。今日では画院の大きな財産となっている。韓副院長は先見の明があり、卓越した経営手腕が絶賛された。

第三に、記録映画を制作。韓副院長が脚本を執筆し、映画会社と提携で三作を手掛けた。その一は、院内高齢になる書画巨匠の人生経験や創作場面を記録した《画苑掇英——書画名家シリーズ》。その二は、中国書法史や国内名家の沙孟海、林散之、啓功などを紹介する《書法芸術》。その三は、《中国篆刻芸術》である。日本でいえば人間国宝のような巨匠の姿を記録した映画なので、今では極めて貴重な資料となっている。韓副院長にしかなしえなかった業務実績は他にもいくつかあるが、話を書画に戻そう。

上海中国画院副院長に昇進した一九八四年以降、韓天衡氏は本業の書画印の中で、特に画業に重心を移した。きっかけは華僑飯店での出来事だった。一九八五年の春節の頃、画院が主催した「香港書画家収蔵家代表団」の歓迎レセプションを華僑飯店で行った。ある香港収蔵家とその席上で発した一言が韓天衡氏のプライドを傷つけたのである。「韓副院長は印や書は素晴らしいが、画は下手だね」と悔しくも言われたのである。ほどなくして韓天衡氏は悟り、画院の副院長である以上、画にも力を注ぐと決心した。ちょうど四十五歳の時のことである。謝稚柳、陸儼少、程十髮らの画伯宅に頻繁に足を運び、試作を持ち込んで、たくさんさんの貴重なアドバイスをいただき、書き直したものを再び持参した。韓天衡氏は天才と言っても過言ではなく、すぐさま自分の画風を見つけ、絵画史の上に自分の立ち

《月夜蘆鴨図》



87×51 1995年

位置を定めた。宋元絵画の伝統を引き継ぎ、篆書や草書の筆遣いを巧妙に組み込み、筆と墨の表現力を豊かに発揮したのが韓天衡氏の画風の特徴である。その後院展に出品した《松鳥図》は古今に例を見ない松や鳥の描き方で、書画界はもちろんメディアも驚かせた。韓天衡氏の画は突然、鮮やかなインパクトを持ち始め、巨匠のレベルに並んだのだ。見事な画風の誕生だった。二〇〇〇年、六十歳で画院を円満に退職。これまで院長や副院長が退職する先例はなく、たいていは名誉職として残る。韓天衡氏は、もっと自分の時間を作りたいと考えたのである。

### 韓天衡美術館の建設

中国は鄧小平氏の改革開放の路線により、驚くほどの速さで発展を成し遂げた。好景気を背景に美術品蒐集のブームが起こり、オークション会社も誕生した。公立や私立の美術館の建設ラッシュも到来した。オー

クション会社の出品依頼や新興財閥の購入希望の打診に対して、韓天衡氏はいつも冗談半分で「女房と収蔵品の取引はしない」と謝絶する。だが、ある役所が韓天衡氏に目をつけた。

二〇一〇年、北京市は東部通州区に新都心「通州新城」の建設を推進した。市役所の移転を目玉とし、各種行政機構や文化商業施設を含む大型プロジェクトだ（二〇一九年の春に市役所の完全な移転が完了した）。

二〇一一年には新都心に区立美術館を建設したく、通州区役所の建設準備室の担当が全国視野で調査した結果、印章を中心に書画もかなりの高額で大手オークション会社で落札される、書画界で随一の収蔵家・韓天衡氏に注目した。書記や区長が提出した購入案と、韓天衡氏の名前を冠する美術館の建設案に対して、韓天衡氏は全作品を寄贈すると回答。書記や区長は想定外の対応に対して言葉を失うほどの感動を受けた。交渉は想像以上に順調だった。しかし契約の直前に予想

外の出来事が起きた。情報がなぜ漏れたのは不明だが、契約の寸前に上海市市役所が乗り出した。韓天衡氏に對して人も物も他所には行かせないとストップがかけられた。市共産党委員会トップの俞正生氏や韓正市長らが事情を直接ヒアリングし、美術館は上海市内に作るようにと指示した。市役所の文化局の担当が来宅し、浦東区、閔行区、嘉定区などの候補地を提示した。

韓天衡氏が嘉定区を選んだ理由は、第一に同区が上海でも有数の文教地区であり、科学技術地区であることだ。第二に町の歴史が悠久である。区内は明・嘉靖年間に建設された上海五大庭園の一つ「古漪園」や、南宋・嘉定十二年にできた国の重点文化財「嘉定孔廟」（孔子廟）もある。そして区内は恩師の一人である陸儼少画伯の故郷であり、その記念館もあった。人口一五八万を有する区役所が四千万円（約六億円）を組み、二年間をかけてモダンな上海市嘉定区立「韓天衡美術館」が二〇一三年夏に竣工、十月にオープンした。展示スペースの床面積は一万一千平方メートルあまり。外観は書画の源「墨」で包むイメージのブラックカラーをベースにした巨大な城だ。元々は七十年間の歴史を持つ「飛聯紡績工場」の跡地を再開発したのだった。

美術館の入口右手の天然石には、二〇一三年に江泽民元国家主席が題字した「韓天衡美術館」の行書文字が刻まれている。これがこの個人名の美術館の格式を物語っている。江元主席が揮毫した題字は、全国で三人の個人名の美術館のみ。上海の劉海粟氏と韓天衡氏の二人、そして香港の手前にある新興都市・深圳市の関山月氏の三人だった。江氏が上海市長だった時代からさまざまな付き合いがあった韓天衡氏だが、しかし今回の題字は上海市共産党委員会が正式な依頼公文書を中央委員会弁公庁（党本部事務局）へ送り、党の許可を経て書いていただいたそうだ。正規ルートだった。



韓天衡美術館の入口の天然石（江泽民元国家主席が揮毫）



韓天衡美術館に訪したアリババ・グループの会長・馬雲氏（右）と

韓天衡美術館は、一階は韓天衡氏の作品展示室で、書画及び篆刻の原印を年代順で陳列。二階は、寄贈品の古書画の陳列。董其昌の卷子（蘭亭序）や張璪、黄道周、倪元璐の名品が目玉だ。三階は、文房四宝などの文物が常設。そこで特に三国時代の魏国造「関中侯印」亀鈕金印は、スポットライトに照らされて眩しいほどに輝いている。金印では、日本の国宝「漢倭奴国王」蛇鈕金印（約一〇八・七グラム）が有名である。そして、同様の蛇鈕を持つ雲南省出土の「滇王之印」金印（九〇グラム）や、江蘇省の「広陵王璽」亀鈕金印（二二・八七グラム）などもよく知られているが、韓天衡美術館所蔵の「関中侯印」金印は一三八グラムで、どれよりも重い。北京や台北の故宫博物院すら所蔵していない漢魏時代の金印の極上品が、いつでも見ることができるのである。

一階にはさまざまな企画展の展示、そして一般市民も利用できる一五〇〇平方メートルのオープンスペースや多目的ホールも備えている。美術館オープンの式



亀鈕金印「関中侯印」（韓天衡美術館蔵）

典に合わせて、「百楽雅集——第九回韓天衡師生書画展」の開幕式も行われた。以来、地下鉄一一号線で市内と結ばれている同美術館に足を運ぶ書画関係者は、年々増え続けている。開館以来、独自の企画でさまざまな企画展を開催。二〇一四年に沈香や香具をテーマに《澄懷觀道 文人香事文物展》、二〇一五年に古代兵器をテーマに《紫電安邦 中国歴代武備展》、二〇一六年に古今名人の書斎用品をテーマに《大匠妙諦 古今文房雅具大展》、二〇一七年に文房四宝および文房用書画をテーマに《歴代文房芸術展》。昨年は、硯の名品を



35.5×5.5×8 2015年

良師授業 去愚解惑 啓新智成 壯志賢者 傳道考  
古 論今通旧 德得大觀

集めた《歴代硯文化展》を主催。これまでに主催・共催した書画展や工芸品展などは、五十件にもものぼる。中でも二〇一四年に上海呉昌碩芸術研究協会と共同主催した《呉昌碩生誕一七〇周年記念書画展》には、同協会の名誉理事を務める複数の日本人書家の出品もあった。随風会展（二〇一四年、山下方亭会長）、白圭社展（二〇一八年、丹羽常見会長）などの日本の書道や篆刻の団体も、国際交流としてこの美術館を利用している。現在はおよそ三千万円の運営費を区の財政より支給され、美術館総監督を務める韓氏長男の回之氏をはじめ、約三十名の学芸員や嘱託職員が献身的に働

き、すでに上海で最も人気が高い活気が溢れる美術館として認知されている。

### 韓天衡文化芸術基金を創設

韓天衡氏は、生涯をかけて蒐集した書画などの名品、一三六点を嘉定区に寄贈。区役所より二千万円（約三億）の奨励金が交付された（韓天衡氏は上海で最高の寄贈数を刷新した。それまでは劉海粟画伯が最多で八百点だった）。韓天衡氏は、韓夫人・応麗華女史と相談した末、個人の収入にせず、文化芸術基金を創設して、晩年に青少年の育成などの公益事業をすることにした。自ら理事長に就任、副理事長は大手酒造会社・国美酒業社長の武玉傑氏が兼任。顧問に人民解放軍前副参謀総長・熊光楷上将や前浙江省長（知事）・方学遠氏、そして中国作家協会共産党委員会書記長・金炳華氏と、盤石の組織だ。

この五年間の間に三十二件の非営利事業を開催し、約千万円（一億五千万円）の経費を協賛した。そのうち上海市書法家協会青少年委員会、《小主人報》（新聞社）と共催した「晒宝杯・青少年書法コンクール」、また上海大手新聞《新民晚報》社などと共催した「海納百川・国際書法篆刻コンクール」が人気の催事だ。優秀賞の副賞は西泠印社社員の原印一顆、一等賞の副賞は西泠印社理事以上の方の原印一顆、そして最も魅力的な副賞は韓天衡氏本人作の原印である。時価数十万元（数百万円）の宝印は特別賞の受賞者に対して贈賞される。各種コンクールへの関西を中心とする日本からの出品数は、昨年の実績で千点を越えたそうだ。

### 師弟巡回展「百楽雅集」

三百人の大台を超える立派な弟子を持つ書画家・篆刻家は、上海では韓天衡氏をおいて他にいない。

中国書協副主席・王丹氏をはじめとする弟子は、上海書協副主席・張偉生氏、徐慶華氏、張索氏のように各地の書協や地方画院印社の役員が多く、そして「天下第一社」の西泠印社では、副秘書長・孫慰祖氏をはじめ、理事や社員を合わせて三十名にも達する人々は、日本人の名誉理事や名誉社員数と変わらないほどの重みがある。日本在住の華人書法家協会会長・晋鷗氏や華人印社社長・鄒濤氏らも門下生である。

二〇〇四年からほぼ毎年、一門のさらなるレベルアップを目指し、と同時に、外部との交流を目的とした「百楽雅集」という集いを各地で開催。展覧会、講演会、揮毫会などを行っている。韓天衡氏は二つの原則を持って運営してきた。一つ、出品料を徴収しないこと。会場の費用、作品の表装料、そして豪華な作品集の制作費用などの全額は、師匠・韓天衡氏個人や韓天衡文化芸術基金が負担している。二つ目は審査制度を設け、入選ラインを六割から七割程度に設定し、弟子たちに競争させる。二〇〇四年に上海よりスタートし、蘇州図書館、浙江省青田博物館、山東省棗莊博物館、四川省杜甫草堂博物館、福建省福州陶齋芸術会館、無錫博物館、山東省博物館、寧波博物館と開催地を変え、そして昨年の第十三回の「百楽雅集」は再び上海に戻り、韓天衡美術館で開催した。各地で開催する度に韓流の旋風が巻き上がる。規模やレベルが中国で一番の「社中展」と私は認識している。

### 益々輝く海派の座主

近年、韓天衡氏は上海市より「上海市文学芸術賞」や「上海市文学芸術家賞」を受賞。書画関係のメディアがアンケートで選出する影響力が最も大きい「中国書法十人」や「最も尊敬する篆刻家」、そして中国書法最高賞「蘭亭芸術賞」にも選ばれた。また市文化行政



1992年に開催された「韓天衡書画篆刻展」の群馬県前橋市の会場にて、韓天衡氏（中央）と郭同慶氏（右）。左は現在、群馬篆刻協会会長を務める飯島俊城氏

より「上海市無形文化財・海派書法の伝承者」として認定証が交付された。

二〇一五年、上海市共産党委員会宣伝部や市文聯などが主催し、韓天衡美術館や韓天衡文化芸術基金회가共催した「韓天衡書歴七〇年記念展」が浙江省美術館で開催された。二十歳から現在に至る各時代の書画印の代表作および文房具、三百点を展示。現在までの百四十冊あまりの著書や作品集も同時に展示された。同年、武漢の湖北省美術館や上海中国画院、韓天衡美術館にも巡回。そして二〇一六年に澳門芸術博物館と雲南省博物館、二〇一七年に山東省博物館と寧波市博物館、二〇一八年に深圳当代芸術館でも開催された。巨大作「濤声」の運搬だけは想像もつかないほどの大変な作業の苦勞を伴ったが、上海市共産党委員会宣伝部や市文聯などの主催で、各地の役所も同格以上の働きをし、会場の調整やメディアの対応は万全だった。

今年で八十歳になった。書画印および美術品の蒐集などは、緩めることなく続けている。海派の書壇・印壇・画壇の新しい座主・韓天衡氏は、益々輝きを増している

るのである。

主な著書および作品集は、『中国印学年表』（一九八七年、上海書画出版社）、『古代瓦当文編』（一九九六年、世界図書出版社）、『新編・中国書法技法篆刻技法と創作』（一九九九年、中国廣播音像出版社）、『中国篆刻大辞典』（二〇〇三年、上海辞書出版社）、『中国篆刻流派創新史』（二〇一一年、上海書画出版社）、『豆廬芸術文踪』（二〇一三年、上海書画出版社）、『天衡五芸』（二〇一八年、上海書画出版社）、そしてさまざまな作品集を合わせると百四十冊を超えた。海派の書壇・印壇・画壇で、右に出る者はいない。二〇一七年には、米国プリンストン大学が大型画集『中国当代絵画大師 韓天衡』も刊行している（*Master Of Modern Chinese Paintings - Han Tianheng*, Princeton Art Gallery Press, 2017.）。

上記のような書画印に関する華やかな実績や文化芸術の発展に対する貢献において、他に比較できるような海派の大家はいない。韓天衡氏は文字通り、皆に尊敬・崇拜される海派の新しい「座主」なのである。

### 対日交流

知日派でもある韓天衡氏は、八〇年代より日本の書壇・印壇と交流し、訪日回数も多い。長女（因之）や長男（回之）を日本に留学をさせ、日本に対して特別な理解がある韓氏一家である。主な対日交流として、まず一九九二年に静岡県ならびに群馬県で「韓天衡書画篆刻展」を開催した。群馬県前橋市での開催は、微力ながら私が力を尽くし、上毛新聞社の佐鳥社長の応援も受け、事前の宣伝広告が効果的で、開幕の当日には県民会館の大展示ホールを観客が埋め尽くした。中曾根康弘氏からも祝電が届いた。韓天衡氏夫妻は展覽会が終了するまで数日間、狭い拙宅に宿泊した。付き合いの歴史は長いのである。

一九九九年、韓天衡氏は中国書法家代表团に参加し、「中国書法展」の開会式に出席。二〇〇二年、静岡、沖縄、大阪、京都及び東京などで講演会を行いながら各地を観光。二〇〇五年、中国書法家代表团に参加し、愛知万博の「国際書道展」のセレモニーに出席。二〇一五年、北陸（富山県）の青柳志郎氏と二人展を開催。青山杉雨、村上三島、梅舒適、今井凌雪などの大家たちとの交流はもちろん、今でも日本の書壇・印壇の方々と幅広く親交している。

余談だが、二〇一三年に北京保利オークションで韓天衡氏が米国籍の華僑のために制作した「知足常楽」印（印材は田黄石）が四〇二・五万元（約六千万円）で落札され、当代の篆刻家の最高値を記録。今年に入っても景気に左右されず、上海・北京のオークション各社で韓天衡氏の印作は数十万元の高額で落札されている。呉昌碩、齊白石と同様、韓天衡氏の書画印は日本にも多い。今後も価値が上がり続けるだろう。

取材の終わりに、今年の夏は浙江省寧波市美術館で、また秋は北京の国家博物館で、多数の新作を含んだ個展が開催されると伺った。氏の益々のご健勝とご活躍を祈念する。



郭同慶 かく・どけい  
書家、日本名山田慶太郎。一九五七年、上海生まれ。一九八七年に來日。王蘧常、銭君匋、方世聰、蕭海春に師事。二〇一四年度に上海（朵雲軒）、東京、京都、前橋で個展を開催。上海書画出版社で作品集『墨海一粟』を出版。翰墨書道会長、東京藝術院名誉院長、全日本華人書法家協会副主席兼秘書長、日本王蘧常先生頭彰会会長、豊道春海頭彰会顧問、日中友好協会参与、群馬県日中友好協会理事、上海中国書法院名誉院士、上海呉昌碩藝術研究協合理事、上海復旦大学王蘧常研究会常務理事などを兼ねる。